

# I B C 番組審議会月報

2004年3月31日 71

I B C 岩手放送

## 第486回番組審議会・議事概要

日時 平成16年3月23日(火) 午前11時～12時30分

場所 I B C 放送会館 大会議室

議題 テレビ「ママ、えがおがきこえるよ」  
放送基準の改正について

出席委員 8名

石川 桂司委員長

藤原 正紀副委員長

熊谷 志衣子委員 小松 務委員 坂田 裕一委員

佐藤 潤次郎委員 山崎 文子委員 吉沢 正則委員

欠席委員 6名

阿部 价男委員 小苺米 葉子委員 中原 志郎委員

米谷 春夫委員 三浦 宏委員 矢佐 俊幸委員

I B C 出席者

小西社長、阿部専務、佐藤常務、

川島編成局長、井上技術局長、村上報道制作局長

金谷番審事務局長

---

議題 テレビ「ママ、えがおがきこえるよ」

放送基準の改正について

< 委員の主な発言 >

(放送基準の改正について)

世論は本来責任ある公共の意見であるパブリック・オピニオンである「よろん」と、気分を取り上げるポピュラー・センチメンツ「せろん」に分かれますが、この峻別をしっかりとしないとマスメディアとしての権威を失うのではないかと心配します。

「5年に1度の見直し」と書いていますが、変化の激しい時代には1年に1度は修正していくべきではないかという印象を持ちました。

33条で個人の自由と名誉に新たにプライバシーが追加されましたが、改正後は「不当に侵したりしない」と「不当」がついたため、自由の保護の点で後退している感じがします。

(ママ、えがおがきこえるよについて)

こういうお母さんがいることが本当に素晴らしく、それに応えた樹里さんも素晴らしかった。耳が聞こえない人にどう接したらいいのか、この番組は教えてくれているのだと思います。

母親と娘の絆の記録がメインになっていますが、最後に父親が出たことで番組が締まった感じがします。親の役割は日々の生活の手助けではなく、自立を促して見守ることだということがよく描けていました。

作る側と取材される側とのお互いの信頼関係が感じられました。そういう点が賞を受けられたのだと思います、本当に良かったと思います。

暗いイメージはなく明るく描き、すべてが前向きということで捉え方が良かったと思います。大きなテーマとして、母親の強さの描写が非常に印象に残りました。

大塚、村松アナのレベルが高く、大変いい番組でした。この手のものを取り上げる時は人権の問題が面倒なんですけど、うまく配慮し、本当によく頑張った親子の姿と、半端でない苦労が伝わってきました。

昨年の5月26日に放送したということですが、その時に番組審議会のテーマに出したほうが良かったのではないかと思います。

皆さんが言われるように何もいう事がない番組で、こういう番組を作る力がIBCにあるのだなと安心しました。ただ、時間とお金がかかる。あとは社長、首脳の方々の裁量で、ぜひお願いしたいと思います。

(その他)

最近、ニュースが遠くなったという印象がします。単純に事実を上げてそれを伝えるだけでいいのか、客観性を守りつつ、世論を契機するというもっと強い個性を持つ必要が今問われていると感じます。

3月5日の「告白 私がサリンをまきました オウム10年目の真実」は非常に見ごたえのある番組でした。TBSはオウム事件では教訓を得たわけですが、逆にいえばそれだけ深い取材をしていたことが、今回の

3時間ドキュメンタリードラマにつながったものと思います。

<局側>

ニュースが遠くなったということについては我々も感じております。小さな村の大きな事件のような視点がちょっと外れてきていることもあり、4月から変えようと今作業を進めているところです。

最初は1990年9月にIBC特集で「神様の忘れもの」というタイトルで樹里ちゃんの小学生の頃を、次は1993年9月に「親の目子の目」という全国放送で「樹里の中学生日記」として中学生部分を取材して放送しました。長期的な取材になっていますが、今回作ったきっかけは、「ママ、えがおがきこえるよ」という本を出したことから、20歳を過ぎたということもあり、取り上げてみようということになりました。この番組に関してはもともと母と子の葛藤というバックボーンがあったので、あの子は十分強く育つのではないかという期待も我々の中にもありました。これからも継続的な取材は続けるつもりですが、あまり深く考えないで取材したら、こういう結果になったというところがあります。

身障者の取り上げ方については、ラジソンを12年担当している中で、やはり普通に接して、妙に気を遣ったりしない方が付き合えるのではないかと思います。特にお母さんが大変協力的でした。

実は樹里ちゃんを一番大事に思っているのはお父さんで、生まれた時から当時の8ミリをずっとお父さんが回しています。3歳ぐらいまで回していて、どうもおかしいと気づいたということです。盛岡の聾学校に入れようとも考えましたが、口話法で普通の教育を受けさせることを決断し、普通の小学校に入れました。そこで「きこえとことばの教室」があり、普通の子になるように親は一生懸命頑張れ、頑張れといい、それにこたえてきたけれど、大学に行って初めて樹里ちゃんは周りもみんな聴こえないから頑張る必要がないことに気づき、どうすればいいのか困ってしまいました。そこでお母さんは「お前は今まで頑張ったのだからもういい」という話をしたそうです。その後、彼女はなりたかったグラフィックデザイナーになりました。ですから番組のポイントは、「もう頑張らなくてもいい」ということかなとディレクターとも話しました。みなさんからのお褒めのことばをいただきましたが、IBCは力があるのだという事を認識できました。今後いろいろな形で地域の情報を発表する場を少しずつ増やしていき、できるだけたくさんの人にいろんな情報を伝えていきたいと思っています。